12. 大学生の柔道授業選択行動要因に関する研究

―スポーツ価値意識と柔道に対する態度並びに他の心理的側面との関連性について―

関東学園大学　高橋　進
講道館　貝瀬　輝夫
関東学園大学　加曽利正美
埼玉大学　野瀬　清喜
平成国際大学　三宅　仁
東京学芸大学大学院　江田　香織
鹿屋体育大学　濱田　初幸
奈良教育大学大学院　高野　千春

12. A study of the Value Consciousness about University Students' Judo Class Participation

Susumu Takahashi (Kanto Gakuen University)
Teruo Kaise (Kodokan Judo Institute)
Masami Kasori (Kanto Gakuen University)
Seiki Nose (Saitama University)
Hitoshi Miyake (Heisei International University)
Kaori Eda (Tokyo Gakugei University)
Hatsuyuki Hamada (National Institute of Fitness and Sports in Kanoya)
Chiharu Takano (Nara University of Education)

Abstract

The purpose of this study was to investigate the following: (1) value consciousness towards sports among university students in judo classes; (2)attitude towards judo; (3) self-efficiency in sports; (4) causal attribution's style towards sports; and (5) the relationships among each factors.

The subjects of reserch range from 18 to 25 years old. Value consciousness which was pre-

pared by Uesugi and other topics which were prepared by Takahashi were measured by use of questionnaire. Each data was analyzed by factor analysis techniques. Particularly between value consciousness and attitude, self-efficiency, causal attribution were analyzed by correlation analysis. The results were as follws:

1. 65.6% of subjects experienced some sports in their junior high school days, 52.5% in their high school days and 36.1% at present. Anyway they were motivated by their interest in sports.
2. Three value consciousness factors towards sports were extracted from factor analysis. It was confirmed that the subjects recognized sports as effective means to obtain something.
3. Six attitude factors towards judo were extracted from factor analysis. It was indicated that judo was recognized to be desirable effect on the body, mind and education. In particular it was suggested that judo was highly evaluated on brightness,refreshment ,and interest.
4. Two self-efficirncy factors in sports were extracted from factor analysis. It was indicated that subjects had a good self-efficiency and good causal attributions' style as related to sports. As a resut it was suggested that subjects had a desirable level of intrinsic motivation.
5. It was clarified that value consciousness towards sports among students and sports experience affected sports study action in university.

I 緒言

2005年11月25日「行動の選択肢に対応する価値報酬が線条体の神経細胞に表現されている」[3]というタイトルで、非常に意義深い論文がサイエンス誌に掲載された。この研究は、過去の経験から、どのように意思決定をするか、更に次の行動選択を如何に行うかという脳のメカニズムを大脳生理学の立場から解明したものである。今日の残虐極まりない犯罪、あるいは精神心理的障害や疾病を鑑みるに、それら選択行動の異常診断や治療に対して一筋の光を投げ掛けたと言っても過言ではあるまい。

ところで、様々な行動選択の要因解明については、既述したような大発見を待たずとも、多岐に亘る学問分野でその解明が進められてきた。ワイナーの原因帰属理論[6]などもその一つであるが、すべての達成行動ケースを説明するには限界があり、他の理論との因果関係なども考慮にいれた検証態度が重要である。いずれにしても、行動を規定する過去の経験は個人によって様々であり、それを説明するためには多次元的な尺度、あるいは多次元的な軸からの考察が余儀なくされるのは当然のことである。

勿論、スポーツ行動要因の解明に関しても、例外ではない。スポーツが生活により密着し、スポーツに対する価値志向が多様化したことは周知のとおりである。また、スポーツ意義への理解や、望ましいスポーツ態度への認知に関しても、教育を通して、メディアを通して深まったことに異論を唱える者はあるまい。

ところが、子供たちを取り巻くスポーツ、あるいは体育の環境、更には子供たちの体力や健康状態は、望ましい方向へ変容したとは言い難く、文部科学省、厚生労働省などの今日的課題として、研究討議が重ねられ、ナショナルスタンダードの作成に向けた答申が示唆されていることも事実である[8]。

文部科学省では「健やかな体を育む教育のあり方に関する専門部会」を中央教育審議会に設置し、「体育の目的の具体的な内容―すべてのこどもたちが身に付けるべきもの―」を示したことは興味深い[8]。特に身に付けるべき「身体能力」のみならず、身に付けるべき「態度」を次の如く、具体的に掲げている。

①「運動やスポーツ自体」の価値に対する態度。
②「チャレンジすること」の価値に対する態度。
③「運動やスポーツを継続すること」の価値に対する態度。
④「フェアープレー」に関する態度。
⑤「協力・責任」に関する態度。

ところで、この指針の中で、価値という言葉がキーワードになっていることに注目したい。小泉らは[4]「大学生のスポーツ行動の価値意識に関する一考察」の中で、「スポーツの価値とは、個人または集団の欲求を満たすことで望ましいとされたスポーツの性能、性質である」としている。更に、スポーツの価値意識を「個人または集団がスポーツを望ましいと考える意識であるといえる。つまり、人とスポーツとの関係にみられる意識である」と説明している。小泉らが述べるように「スポーツを望ましいと考える意識が良好になること」こそが、上述した答申の身に付けるべき「態度」を獲得したことになるのではないか。一方上杉[15]は、「スポーツ行動を分析する1つの方法は、行動の背後にあるスポーツの価値意識を知ることである」と述べ、スポーツに内在する価値意識を、スポーツの手段性と自己目的性、禁欲性と即時性という2軸で捉え、スポーツの価値意識の4類型を提示した。その中で上杉は、所謂身に付けるべきスポーツ・体育に対する態度を持ち、望ましいスポーツ行動選択ができる者、例えば体育教師などは、あるパターン化されたスポーツ価値意識を有していることを明確[16]にしている。

筆者ら[14]も、体育が選択制とされている大学で、「スポーツを望ましいと考える意識が良好」であろう体育履修学生のスポーツ種目選択行動要因に着目して研究を進めてきた。特に、筆者らは、大学に関わらず高等学校や中学校で必修種目として取り上げられることの多い「柔道」について、大学で柔道を選択した学習者の態度や行動要因を規定する原因帰属様式、有能感、更には自尊感情、そして、それら相互の因果関係を明確にすることを課題とした。何故「柔道」かについては、「日本発の国際的運動文化にも関わらず、中学生、高校生の柔道に対する態度が良好でないこと」に危機感を覚えたことに端を発するが、「柔道がグループエンカウンターの機能を有し、これからの体育・スポーツで大いに期待できることが明確にされた」[14]ことと併せて鑑みれば、筆者らの研究姿勢に疑問を投げかける余地はないと感じている。

そこで、本研究では、上杉らが示唆するように、行動を決定する一要因であるスポーツ価値意識に着目し、実際に柔道を大学で選択履修した学生（1コマ90分・15コマ終了後2クラス）の心理的諸側面（態度、原因帰属様式、自己有能感など）との因果関係を明らかにすることを目的とした。スポーツ価値意識については、柔道履修学生のスポーツ・運動経験によって形成されたものであり、「どのようなスポーツ価値意識を持つ者が柔道を履修選択するのか」について、その傾向を示唆できるように研究を進めた。更に、柔道に対する心理的諸側面との関係を明らかにするために、スポーツ価値意識を含め、心理的諸側面を因子分析的手法による特性上から分類・比較することとした。

Ⅱ　研究方法

1．調査対象者

U大学教養科目、実技柔道を履修選択した男女学生61名（2クラス分・男女共修）。

2．調査時期

2006年7月授業15コマ最終授業（1コマ90分）。

3．授業計画

高橋らの研究[14]、「柔道授業に構成的グループエンカウンターを導入した場合の効果について」で用いた指導案（14時間）に、多少修正を加え15時間分とし、授業を進めた。

4．調査内容

質問の内容については、以下の項目、尺度から構成した。

(1) 一般項目（対象者の属性）

所属、氏名、性別、年齢、現在のクラブ活動状況（運動部・文化部）、高等学校時のクラブ活動状況、中学校時のクラブ活動状況など。

(2) スポーツに対する価値意識

上杉の示したスポーツに関する価値意識を問う質問項目[15]から、浅沼が[1]選定した12項目を採用し、一部表現を変えて本研究の質問項目とした。

(3) 柔道に対する項目

①自身のこどもに柔道をさせたいか否か

②柔道に対する態度尺度（感情的成分及び認知的成分から構成。高橋[10]の尺度を一部修正し使用。項目の総数は、19項目。

(4) その他の項目

①スポーツに対する有能感（統制感を示唆する2項目、身体的有能さを示唆する2項目）。

②柔道の学習場面に含まれると思われる事態（原因帰属事態）と、それを引き起こすと考えられる原因（帰属因）からなる原因帰属様式を問う項目。原因帰属事態としては、4事態を採用し、事態ごとに好ましい事態（正事態）と好ましくない事態（負事態）を作成した。また、帰属因としては、ワイナー[6]の内的－外的、及び安定性の次元に従い、「能力」「努力」「課題の困難度」「運」の4要因とした。以上のことから、1（原因事態）×2（正負事態）×4（帰属因）の8項目である。

5．分析方法及び手順

(1) 一般項目については、適当な回答に○印をするか、該当する答えを記入させた。統計処理については、各項目の頻度及び％を算出した。（所属クラブ活動状況を示す回答については、運動クラブ所属者と非所属者との比較を行った）。

(2) スポーツに対する価値意識に関する12項目については、その価値意識構造を明らかにするために、また、柔道に対する態度尺度については、柔道の態度構造を確認する意味において、更には、スポーツに対する自己有能感についてもその項目構成要因を再認するために、以下の手順で統計処理を行った。

①上述した各項目は「よく当てはまる」から「ほとんど当てはまらない」までの4件法で回答を求め、それぞれに4点から1点の得点を付与した。

②「価値意識に関する12項目」「態度に関する19項目」「有能感に関する4項目」ごとの評定値に対して、共通性の推定値を1.0とした主因子解による因子分析を施した（反復推定あり）。

③その結果、固有値1.0以上である因子を抽出した。

④更に得られた因子行列に対して、Normal・Varimax回転を施した。

⑤因子の解釈・命名については因子負荷量0.4以上の項目を原則として有効とし、解釈可能な範囲で命名を行った。

⑥解釈・命名可能な因子については、因子平均得点を算出した（因子の個人得点＝各因子に含まれる因子負荷量0.4以上の項目のうち因子を代表すると判断できる項目の評定得点の合計÷項目数)。

(3) 原因帰属様式を問う８項目、並びに「自身の子供に柔道を行わせたいか否か」を問う項目については、「よく当てはまる」から「ほとんど当てはまらない」までの４件法で回答を求め、それぞれに４点から１点の得点を付与し、各項目の平均値、標準偏差を算出した。

(4) スポーツ価値意識と柔道に対する心理的諸側面との関連性を明らかにするために、態度尺度、有能感尺度（有能感に関わる因子)、帰属因尺度（８項目）それぞれの変数と、価値意識尺度（スポーツ価値意識に関わる因子）の２変数間の積率相関係数（ピアソン）を求めた。

(5) 態度、価値意識、有能感、及び帰属因が、運動経験に影響を受けているか否かを明らかにするために、中学校、高等学校、並びに現在の運動実施群（クラブ活動への所属群)、未実施群の各尺度間について、その平均得点をT-TESTにより検定した。

尚、本研究による全ての計算処理は、spssxプログラムによって行われた。

Ⅲ　結果と考察

1.　調査対象者の属性

調査対象者の属性については、表１～表５に示した。その結果を考察すれば以下の如くである。

①性別・年齢

表１には、柔道履修学生の男女数（２クラス分）を示した。その結果、男子学生16名、女子学生45名と、女子の履修者が多いことが窺えた。一般的に女子は、高等学校期までに柔道学習経験を得る機会に乏しいのが実情である。しかしながら、柔道は、日本発祥の国際的運動文化であるという認知は高く、本研究の女子学生についても、共修の可能性に鑑み、柔道に触れてみたいという欲求が、履修行動に結びついたと予測される。

また、年齢については、調査対象者の年齢別度数を表２に示した。

②運動クラブ活動状況（大学)

表３には、大学においての運動クラブ所属、文化クラブ所属、無所属のそれぞれの度数を示してある。その結果、大学のクラブ活動全体への所属率は、80.4％とかなり高いことが示唆された。その中で、運動クラブへの参加状況も、全体の36.1％

表１　対象者の性別
Table 1 Sex of students

項目	frequency	%	cum%
男性	16	26.2	26.2
女性	45	73.8	100.0
total	61	100.0	

表２　対象者の年齢
Table 2 Frequency of age

年齢	freuency	%	cum%
18	28	45.9	45.9
19	24	39.3	85.2
20	2	3.3	88.5
22	1	1.6	90.2
23	5	8.2	98.4
25	1	1.6	100.0
total	61	100.0	

表３　クラブ活動の経験
Table 3 Experience of school's club (university)

項目	frequency	%	cum%
未実施群	12	19.7	19.7
運動部	22	36.1	55.7
文化部	27	44.3	100.0
total	61	100.0	

表4　クラブ活動の経験
Table 4 Experience of school's club (high-school)

項目	frequency	%	cum%
未実施群	4	6.6	6.6
運動部	32	52.5	59.0
文化部	25	41.0	100.0
total	61	100.0	

表5　クラブ活動の経験
Table 5 Experience of school's club (junior highschool)

項目	frequency	%	cum%
未実施群	3	4.9	4.9
運動部	40	65.6	70.5
文化部	18	41.0	100.0
total	61	100.0	

であった。平成16年度文部科学省白書[7]に示された「運動部所属高等学校生徒の推移」によれば、平成15年度の高校生の運動部所属率は37.4％であり、本調査大学生の運動部所属割合は、低いとは言い難い。いずれにしても、本調査対象学生は、積極的に大学生活を送ろうとしている集団であることは、文化クラブ所属率と併せて鑑みれば容易に理解できる。

②運動クラブ活動状況（高校）

表4には、本調査対象者の高校時におけるクラブ活動状況を示した。その結果、運動クラブへの所属率、52.5％、文化クラブ41.0％であることが明らかにされた。②で既述した文部科学省の統計と比較しても、運動クラブ活動参加率がかなり高いことが窺える。本調査対象者は、高等学校の生活においても、所謂文武両道を実践していたことが理解されるとともに、健全な心理的特性を有していたことも推測できよう。

③運動クラブ活動状況（中学）

表5には、本調査対象者の中学生期におけるクラブ活動状況を示した。運動部所属率は、65.6％であり、平成15年度の運動部所属中学生の割合が70.8％[7]であることと比較すれば、本調査対象者が、中学生期において、特に運動クラブ活動への所属傾向が高かったとは判断し得ない。それよりも、高等学校でのクラブ活動所属率と併せて、その低下傾向を鑑みれば、特に運動クラブ所属率の低下の割合が少ないことは一目瞭然である。そのことは、本調査対象者が、次項で分析・検討を加える運動・スポーツに対する価値意識に対して良好な態度を有している可能性を示唆していよう。

以上、対象者の属性について得られた結果の考察を加えてきたが、これらの結果を踏まえつつ、更に分析を進めることとしたい。

2．調査対象者のスポーツに対する価値意識の構造並びに価値意識尺度の評価

Varimax回転後の抽出因子及び因子負荷量を表6に示した。この結果、固有値1.0以上の基準

表6　スポーツに対する価値意識に関する因子分析結果
Table6 Rotated factor loading and naming of factors (value consciousness towards sports)

因子	項目		因子負荷量
F1:競技スポーツ志向価値意識因子	V 1	スポーツで自己の限界に挑戦したい	0.846
	V 2	厳しい練習をしてまでもスポーツをしたい	0.830
	V 3	どこまでも技術の向上をめざしたい	0.851
	V 5	厳しい指導を受けてまでもスポーツをしたい	0.657
	V 6	競技会・大会をめざしてがんばりたい	0.743
	V12	スポーツは何かを得るための手段である	0.415
F2:享楽的スポーツ志向価値意識因子	V 4	いつでもや止められる気軽さをもってスポーツをしたい	0.750
	V 7	遊びとしてスポーツをしたい	0.880
F3:解釈不能	V 8	目的を持たずに面白さを味わうだけではスポーツをする意味がない	0.700
	V 9	スポーツを通して人間形成ができたとしてもそれは単に結果にすぎない	0.877
F4:手段論的スポーツ志向価値意識因子	V 10	スポーツを通して礼儀・作法を身につけたい	0.816
	V 11	スポーツを生活の気晴らしのひとつとして行いたい	0.532
	V 12	スポーツは何かを得るための手段である	0.467

*因子負荷量0.4以上の項目を原則として因子の解釈に採用した

で抽出された因子は４因子（表７参照)。そのうち解釈・命名可能な因子は、３因子であった。(回転後の貢献度の合計は、全分散の66.7％であった。尚、因子の解釈・命名における因子負荷量の基準は、原則として0.4以上とした)。尚、採用した質問項目は、それぞれ上杉の「禁欲性－即時性」「自己目的性－手段性」の２軸を示す質問項目から、12項目を採用した。但し、即時性を示す代表項目「いつまでも気楽さをもってスポーツをしたい」はそのままの表現としたが、否定的表現をできるだけ避ける意味から「厳しい練習をしてまでもスポーツをしたくない」並びに「厳しい指導を受けてまでもスポーツをしたくない」の２項目は、それぞれ「厳しい練習をしてまでもスポーツをしたい」「厳しい指導を受けてまでもスポーツをしたい」という表現に変えた。従って、禁欲を示す項目は５項目、即時性は１項目、自己目的性、手段性はそれぞれ３項目で質問項目を構成してある。

表７　相関行列の固有値
Table7 Eigenvalue of rotated factor matrix

因　子	固有値	貢献度	累積貢献度
1	3.904	32.530	32.530
2	1.633	13.609	46.139
3	1.351	11.262	57.401
4	1.112	9.270	66.670

（1）第１因子については、「V1・スポーツで自己の限界に挑戦したい」「V2・厳しい練習をしてまでもスポーツをしたい」「V3・どこまでも技術の向上をめざしたい」「V5・厳しい指導を受けてまでもスポーツをしたい」「V6・競技会・大会を目指したい」「V12・スポーツは何かを得る手段である」の項目に高い因子負荷量を示した。V1からV6までの５項目は、全てスポーツの持つ禁欲性を示し、V12に関しては手段性を示している。この因子は、上杉の分類によれば、世俗内禁欲型を示している（上杉は、因子分析ではなく林の数量化Ⅲ類によるパターン分析を試みている）が、ここでは、その構成項目から「競技スポーツ志向価値意識因子」と命名した。

（2）第２因子に含まれる因子負荷量の高い項目は、「V4・いつでも止められる気軽さをもってスポーツをしたい」並びに「V7・遊びとしてスポーツをしたい」であった。この２項目は、正しく、それぞれ即時性と自己目的性を示す項目であり、上杉の分類、レジャー型を示唆しているが、この因子を「享楽的スポーツ志向価値意識因子」と命名した。

（3）第３因子については、「V8・目的を持たずに面白さを味わうだけではスポーツをする意味がない」「V9・スポーツを通して人間形成ができたとしても、それは単なる結果にすぎない」の２項目について、因子負荷量が高かった。V8については、スポーツの自己目的性の価値を示唆し、V9は、スポーツの手段性の価値を示唆している。この２項目については、それぞれ価値志向の両極を意味しているが、ともすると、スポーツの価値否定を示す因子と解釈され、本来の項目が持つ意味からその解釈が逸脱する可能性を孕んでいる。従って、混同を避ける意味から、無理に解釈・命名を行わず、以降の分析から除外することとした。

（4）第４因子に負荷量の大きな項目は、「V10・スポーツを通して礼儀・作法を身に付けたい」「V11・スポーツを生活の気晴らしのひとつとしたい」「V12・スポーツは何かを得るため

表８　スポーツ価値意識に対する各尺度得点
Table8 Factor mean score,standard deviation

因　子　名	平均得点	標準偏差
F1:競技スポーツ志向価値意識因子	2.700	0.692
F2:享楽的スポーツ志向価値意識因子	2.844	0.733
F4:手段論的スポーツ志向価値意識因子	3.262	0.483

表９　柔道の態度に関する因子分析結果
Table 9　Rotated factor loading and naming of factors (attitude towards judo)

因子	項目		因子負荷量
F5:社会化を促進する精神鍛錬因子	V 19	柔道は持久力を向上させる	0.542
	V 23	柔道は忍耐力を養う	0.864
	V 24	柔道は協調性を養う	0.579
	V 25	柔道は社会性を養う	0.812
	V 26	柔道はリーダーシップを養う	0.537
F6:否定的感情因子	V 15	柔道はつらい	0.808
	V 17	柔道は痛い	0.826
	V 18	柔道は苦しい	0.730
F7:徳性の涵養を伴う肯定的感情因子	V 13	柔道は明るい	0.680
	V 14	柔道は楽しい	0.735
	V 16	柔道はさわやかである	0.417
	V 28	柔道は気持ちを安らげる	0.790
	V 29	柔道はモラルを培う	0.444
F8:心身健康促進因子	V 21	柔道は筋力を向上させる	0.711
	V 22	柔道は健康を維持向上させる	0.593
	V 29	柔道はモラルを培う	0.564
	V 30	柔道は礼儀正しさを養う	0.647
	V 31	柔道は努力すれば何事もできるといった気持ちを養う	0.449
F9:達成動機向上因子	V 26	柔道はリーダーシップを養う	0.418
	V 27	柔道は自己のプライドを向上させる	0.899
	V 31	柔道は努力すれば何事もできるといった気持ちを養う	0.461
F10:体力向上因子	V 19	柔道は持久力を向上させる	0,443
	V 20	柔道は調整力を向上させる	0.814
	V 21	柔道は筋力を向上させる	0.513

*因子負荷量0.4以上の項目を原則として因子の解釈に採用した

の手段である」の３項目であった。V10・V12は、スポーツの持つ手段性を、V11に関しては自己目的性を示唆している。価値志向の分類からみれば、第３因子同様、両極に位置する項目が混在している。第３因子に関しては、無理に解釈・命名を行わなかったが、この因子に関しては、その項目構成内容から「手段論的スポーツ志向価値意識因子」と命名した。

（5）解釈・命名した因子の評価得点（因子平均得点）については、表８に示してある。その結果、「競技スポーツ志向価値意識因子」の得点は、2.700±.692（点）、「享楽的スポーツ志向価値意識因子」は、2.844±.733（点）、並びに「手段論的スポーツ志向価値意識因子」は、3.262±.484（点）であった。

以上から、本調査対象者のスポーツ価値意識を鑑みれば以下の如くである。

①スポーツの価値意識の中で、競技志向性、享楽的志向性については、それらを支持する傾向にあることが示唆された。

②スポーツの持つ手段論的価値に対する評価が非常に高いことが窺えた。

３．調査対象者の柔道に対する態度構造並びに態度尺度の評価

Varimax回転後の抽出因子及び因子負荷量については表９に示した。この結果、固有値1.0以上の基準で抽出された因子は６因子（表10参照）。そのうち解釈・命名可能な因子は、６因子であった。（回転後の貢献度の合計は、全分散の66.8％であった。尚、因子の解釈・命名における因子負荷量の基準は、原則として0.4以上とした）。

表10　相関行列の固有値
Table10 Eigenvalue of rotated factor matrix

因子	固有値	貢献度	累積貢献度
1	3.825	20.132	20.132
2	3.159	16.627	36.760
3	2.092	11.008	47.768
4	1.481	7.797	55.565
5	1.096	5.769	61.334
6	1.039	5.467	66.801

（1）第１因子については、「持久

力を養う」「忍耐力を養う」「協調性を養う」「社会性を養う」「リーダーシップを養う」などの項目に高い因子負荷量を示した。「持久力」については、「忍耐力」と同様に、精神的な持久力と解釈すれば、この因子は、柔道をとおした精神の鍛錬効果を示唆する因子と解釈できる。また、「社会性」「リーダーシップ」の涵養については、いわゆる精神力の中で、社会により適応するための能力ということができる。よってこの因子を「社会化を促進する精神鍛錬因子」と命名した。

(2) 第2因子に含まれる項目は、「つらい」「痛い」「苦しい」などであった。これらは、まさに柔道に対する否定的な感情を示している。従って、この因子を「否定的感情因子」と命名した。

(3) 第3因子に負荷量の大きな項目は、「明るい」「楽しい」「さわやか」などの柔道に対する肯定的な感情を示唆する項目と、「気持ちを和らげる」「モラルを培う」という柔道の持つ精神性や徳性の涵養に対する肯定的認知を示す項目であった。この両側面を考慮して解釈し、「徳性の涵養を伴う肯定的感情因子」と命名した。

(4) 弟4因子に含まれる項目は、「筋力の向上」「健康の促進」「モラルを培う」「努力感の涵養」などであった。これらは、心と身体両面の鍛錬効果を示唆しているが、特に「健康の促進」という項目が含まれていることにより、「心身健康促進因子」と命名した。

(5) 第5因子は、「リーダーシップの涵養」「プライドの向上」「努力感の涵養」の3項目が、0.4以上の因子負荷量を示した。「リーダーシップ」が高ければ、自己の効力感は、「フォロワー」よりも高く、当然「やる気」は高揚するであろう。「プライド」の高さについても、物事を遂行していく上での「やる気」と関係があることは言うまでもない。また、「努力感の健全さ」は、ワイナーの示唆するように、達成動機水準の高さと正の相関を示す。以上を鑑み、この因子を「達成動機向上因子」と命名した。

(6) 第6因子を示す項目は、「持久力を養う」「調整力を養う」「筋力を培う」であった。これらは、柔道が体力の向上に寄与することを示唆している。よって、この因子を「体力向上因子」と命名した。

以上6因子が解釈命名されたが、本調査対象者についても、高橋、矢野ら[10) 11)]の先行研究とほぼ同様な因子構造を有していることが支持された。

(7) 解釈・命名した因子の評価得点（因子平均得点）については、表11に示してある。その結果、「社会化を促進する精神鍛錬因子」は、2.892±.560（点）、「否定的感情因子」は、2.377±.703（点）、「徳性の涵養を伴う肯定的感情因子」は、3.000±.540（点）、「心身健康促進因子」は、3.325±.405（点）、「達成動機向上因子」は、2.694±.518（点）、並びに「体力向上因子」は、3.126±.517（点）であった。

以上を概観して考察を加えれば次の如くである。

①柔道が精神や身体に及ぼす効果的側面への認知は、高橋の研究[10) 11) 12)]を支持するべく良好であった。特に、現代社会の課題でもある、「社会性」や「徳性」の涵養に対す認知が高いことは、柔道学習・あるいは柔道そのものの社会的有効性を示唆するものでもある。

表11　柔道に対する態度に関する各尺度得点
Table11 Factor mean score,standard deviation

因　子　名	平均得点	標準偏差
F5:社会化を促進する精神鍛錬因子	2.892	0.560
F6:否定的感情因子	2.377	0.703
F7:徳性の涵養を伴う肯定的感情因子	3.000	0.540
F8:心身健康促進因子	3.325	0.405
F9:達成動機向上因子	2.694	0.518
F10 :体力向上因子	3.126	0.517

表12　スポーツに対する自己有能感に関する因子分析結果
Table12 Rotated factor loading and naming of factors (self-efficiency towards sports)

因子	項　　目		因子負荷量
F11:身体機能に関する自信因子	V 34	体力には自信がある	0.940
	V 35	スポーツには自信がある	0.879
F12:スポーツに関する統制感因子	V 32	努力すれば、必ずスポーツは上達する	0.725
	V 33	スポーツにとって重要なことは、努力をすることである	0.903

*因子負荷量0.4以上の項目を原則として因子の解釈に採用した

②感情的にも、否定的傾向が認められず他のスポーツと同様、肯定的な感情が優位であった。高橋の先行研究[10) 11) 12)]では、柔道に対する否定的感情傾向は、少なからず現存してしまうことが問題視されてきたが、本研究の結果は、今までの研究結果を覆すこととなった。その理由としては、本研究の柔道履修学生が、選択制であるにも拘らず、自ら柔道を選択履修したことに起因すると考えられよう。また、授業計画自体が、柔道自身の持つ構成的グループ・エンカウンター導入の効果を狙ったものであり、高橋の先行研究[14)]で示された効果がより反映された結果かもしれない。いずれにせよ、今後とも本研究結果を再認するための継続的な研究が課題であろう。

4．調査対象者のスポーツ・運動に対する有能感の構造並びに有能感尺度の評価

Varimax回転後の抽出因子及び因子負荷量については表12に示した。この結果、固有値1.0以上の基準で抽出された因子は2因子（表13参照）。そのうち解釈・命名可能な因子は、2因子であった。（回転後の貢献度の合計は、全分散の80.1％であった。尚、因子の解釈・命名における因子負荷量の基準は、原則として0.4以上とした）。

（1）第1因子に因子負荷量の高い項目は「体力には自信がある」「スポーツには自信がある」の2項目であった。2項目ともに身体機能に対しての自信を示唆している。従ってこの因子を「身体機能に対する自信因子」と命名した。

（2）第2因子を示す項目は「努力すれば、必ずスポーツは上達する」「スポーツにとって重要なことは、努力をすることである」であった。文字通り努力の重要さを物語る因子であり、スポーツに対する統制感を意味している。よって、この因子を「スポーツに対する統制感因子」と命名した。

（3）解釈・命名した因子の評価得点（因子平均得点）については、表14に示してある。

その結果、「身体機能に対する自信因子」の得点は、2.238±.804（点）、「スポーツに対する統制感因子」は、3.426±.597（点）であった。

特に、スポーツ実施に対する統制感が非常に良好であることは、その尺度得点が示唆するとおりである。このことは、本研究対象者のスポーツに対する内的動機水準の高さを示すと同時に、選択であるスポーツ実技を

表13　相関行列の固有値
Table13 Eigenvalue of rotated factor matrix

因　子	固有値	貢献度	累積貢献度
1	2.115	52.884	52.884
2	1.088	27.191	80.075

表14　有能感に関する各尺度得点
Table14 Factor mean score, standard deviation

因　子　名	平均得点	標準偏差
F11:身体機能に関する自信因子	2.238	0.804
F12:スポーツに関する統制感因子	3.426	0.597

表15　帰属因尺度得点
Table15 Causal attribution style's score

項目	帰属因	事態	平均得点	標準偏差
V 36　技術が上がらないのは能力のせい	能力	負	2.377	0.820
V 37　技術が上がらないのは努力不足	努力	負	3.213	0.733
V 38　技術が上がらないのは課題が難しい	課題	負	2.066	0.680
V 39　技術が上がらないのは運が悪いから	運	負	1.410	0.588
V 40　技術の上達は能力のせい	能力	正	2.426	0.784
V 41　技術の上達は努力のせい	努力	正	3.426	0.618
V 42　技術の上達は課題が簡単だから	課題	正	1.885	0.755
V 43　技術の上達は運が良いから	運	正	1.525	0.788

敢えて履修したという行動の一因を物語っていよう。

5．対象者の原因帰属様式並びに「自身の子供に柔道を行わせたいか否か」を問う項目の評価

表15には、「技術の上達」という原因事態に対して、正負の２事態、能力、努力、課題、運の４要因のケースを想定した計８項目の質問に対する対象者の平均得点並びに、標準偏差を示した。

その結果、負事態において、その平均得点が高かったのは、「技術が高くならないのは、努力が足りないからである・3.214±。820(点)」であり、他の３項目については何れも低値であった。また、正事態についても、４要因の中で、特に「努力因」に対する帰属得点が3.426±、618（点）と高値を示した。ワイナーが示唆[6]するように、正・負事態を「努力因」に帰属させる傾向が高いということは、帰属事態に対する達成動機水準が高いことを物語っている。従って、本調査対象者は、運動に対する有能感尺度の考察で示唆したように、達成動機水準が良好であることを再認することとなった

ところで、「自分の子供にも柔道を経験させたいか」に対する回答結果につては、表16に示してある。その平均得点は、3.410±.761（点）と、「柔道経験をさせたい」と感じる傾向が強いことが窺える。柔道授業内容については、既述した様にグループエンカウンターの要素を含み、授業者にとって、柔道そのものの教育性を理解し得たことが、回答結果に反映したものと判断できる。

6．スポーツ価値意識と柔道に対する態度並びにその他の心理的側面との関連性

態度尺度、有能感尺度（有能感に関わる因子）、帰属因尺度（８項目）のそれぞれの尺度と、価値意識尺度（スポーツ価値意識に関わる因子）の２変数間の積率相関係数（ピアソン）を求めた結果を表17に示した。

それらを要約すれば以下のとおりである。

①「競技志向性をスポーツの第一義的価値に置く傾向の高い者ほど、柔道に対する態度の中で『否定的な感情』『達成動機向上』傾向が高い」ことが窺えた。また、スポーツに対する自己有能感の２側面（体力・スポーツに対する自信、統制感）についても正の相関関係を確認す

表16　柔道学習希望（将来の子供へ）　手段論的スポーツ志向価値意識
Table16 Needs of judo learning

項目	平均得点	標準偏差
V 44　自分の子供にも柔道を経験させたい	3.410	0.761

表17　スポーツ価値意識と態度、有能感、帰属因尺度との相関関係(ピアソンの積率相関係数)
Table17 Correlation between value consciousness and attitude, self-efficiency,causal attribution

尺度(変数)	F1		F2		F4	
	相関係数	有意水準	相関係数	有意水準	相関係数	有意水準
F5	0.026	−	0.194	−	0.242	−
F6	0.393	**	−0.067	−	0.369	**
F7	−0.193	−	0.151	−	−0.055	−
F8	0.233	−	0.072	−	0.233	−
F9	0.261	*	0.114	−	0.245	−
F10	0.229	−	0.009	−	0.147	−
F11	0.523	**	−0.092	−	0.030	−
F12	0.550	**	−0.027	−	0,328	**
V36	−0.076	−	0.099	−	−0.001	−
V37	0.085	−	0.156	−	0.059	−
V38	0.019	−	0.155	−	−0.087	−
V39	0.055	−	0.112	−	0.065	−
V40	0.163	−	−0.013	−	0.067	−
V41	0.077	−	0.002	−	−0.027	−
V42	0.007	−	−0.078	−	−0.084	−
V43	0.157	−	−0.188	−	0.114	−

*・・・相関係数は5%水準で有意
**・・・相関係数は1%水準で有意
—・・・相関係数は有意ではない

ることができた。

②「手段論的スポーツ志向性の高い者ほど、スポーツに対する統制感が高い傾向にある」ことを統計的に示唆することができた。

①の結果を鑑みれば、柔道に対する2側面「否定的な感情」「達成動機志向」の一見その相反する態度と、競技志向性との間に正の相関関係が確認されたが、その理由について考察を加えたい。

競技志向性が高いということは、当然、スポーツ技能を高くしたい。あるいは、勝つためには努力を惜しまないという姿勢を有していることは言うまでもあるまい。従って、本研究結果が示唆するように、柔道に限らず達成動機に関わる態度についても良好であることは容易に推察できる。

ところで、勝利を目指すスポーツの道程の険しさ、厳しさへの認識の高さは、当然ながら、競技志向性の高さに寄与していよう。本研究で抽出された「否定的感情因子」を構成する項目は、「苦しい」「つらい」などであり、上述した勝利への道のりの厳しさを示唆していることでもある。

既述のように考えれば、柔道に対する2側面「否定的な感情」「達成動機志向」の一見相反する態度と、競技志向性との間に見出された正の相関関係が説明できよう。

更に、競技志向性の高い者ほど、スポーツ・体力に対する自己有能感の2側面についても良好であることが示唆されている。自己有能感の高さは、内発的動機水準の高さとも正比例している[2)]ことを考えれば、競技志向性の高い者ほど、所謂スポーツ授業に関しての取り組みも良好であることが窺える。

しかしながら、この論拠のみで柔道授業選択履修行動要因が、履修者の持つ競技志向性だけに因るものと決定づけることは危険である。従って、次の事象の分析と併せて判断をしたい。

ところで、表18に示したように、78.7%のものが「手段論的スポーツ志向性の価値評価得点」

2.670（点）以上であり、本対象者の多くが、スポーツを手段論的に捉えている傾向が強いことが理解できる。また、上記尺度と正の相関を示している「スポーツに対する統制感」の尺度得点も、3.426±.597（点）とかなり高い得点である。スポーツに対する統制感は、スポーツを行う上での達成動機を規定する要因ともなり得ることは周知のとおりである。従って、①及び②の結果から得られた因果関係が、一般化できるものであるならば、次のことが示唆できる。

表18　手段論的スポーツ志向価値意識因子得点の分布
Table18　Frequency of F12'score

点数分布	度数	%	cum%
2.33	3	4.9	4.9
2.67	10	16.4	21.3
3.00	15	24.6	45.9
3.33	10	16.4	62.3
3.67	15	24.6	86.9
4.00	8	13.1	100.0
total	61	100.0	

ｉ）授業者集団の心理的特性を把握し、より効果的に授業運営を図るためにも、スポーツ価値意識を明らかにすることは有効である。

ii）「スポーツは競技としての価値が第一義的である」「スポーツは何かを得るための手段」と考える志向性の強さは、共に授業者の内発的動機あるいは達成動機水準の高さを規定すると同時に、自発的スポーツ履修行動を誘発する可能性を孕んでいる。

いずれにしても、大学においてスポーツ種目を選択しようとする行動要因に、少なからずスポーツに対する価値意識が関連していることは、上述した結果からも明確になった。何故柔道を選択したかについては、柔道に対する態度が物語っていようが、今後は、更に変数を加味し、その因果関係を明確にしていくこと、一般化できる結論へ結びつけることが課題である。

7．運動経験の差異による各尺度への影響。

表19には、中学校、表20には高等学校、表21には現在の運動クラブ活動への所属の有無による各尺度得点間の統計的差異をT-Testによって検定した結果を示してある（統計的に有意差が認められた尺度のみ）。

その結果、中学校、高等学校、現在の運動経験の有無による統計的差異が共通して示唆されている尺度は「柔道に対する否定的感情」「スポーツ・体力に対する自信」「スポーツに対する統制感」「競技志向性」「手段論的スポーツ志向性」であった。また「柔道に対する否定的感情」の尺度平均得点は、どの段階においても運動クラブ活動未実施群のほうが、実施群に比較して統計的に低いが、他の尺度全てについては、運動クラブ活動実施群のほうが、未実施群に比較して有意に高いことが明らかになった。

これらの結果は、運動クラブ活動実施、あるいは運動クラブ実施経験が、「スポーツの価値意識」、あるいは「スポーツ・体力に関する有能感」の方向性を決定付けることを示唆している。

表19　運動クラブ所属群と非所属群の各尺度得点及び群間の有意差検定（中学校時）
Table19 Each factor mean score, standard deviation, and t-test (between practicing group and not practicing group)

因　子	所属群(N=40)		非所属群(N=18)		t-test
	mean	S.D.	mean	S.D.	
F1	2.925	0.526	2.222	0.812	P<0. 01
F4	3.342	0.486	3.037	0.441	P<0. 05
F6	2.517	0.502	2.148	0.649	0.065(有意確率)
F11	2.475	0.716	1.861	0.801	P<0. 01
F12	3,588	0.437	3.000	0.728	P<0. 01

表20　運動クラブ所属群と非所属群の各尺度得点及び群間の有意差検定（高等学校時）
Table20 Each factor mean score, standard deviation, and t-test(between practicing group and not practicing group)

因　子	所属群(N=32)		非所属群(N=25)		t-test
	mean	S.D.	mean	S.D.	
F1	3.042	0.526	2.287	0.706	P<0.01
F4	3.385	0.465	3.120	0.460	P<0.05
F6	2.531	0.737	2.133	0.631	P<0.05
F11	2.609	0.738	1.780	0.708	P<0.01
F12	3.578	0.477	3.180	0.690	P<0.01
V39	1.531	0.507	1.200	0.408	P<0.01
V40	2.625	0.751	2.200	0.764	P<0.05
V42	2.125	0.833	1.560	0.507	P<0.05
V43	1.719	0.813	1.240	0.523	P<0.05

表21　運動クラブ所属群と非所属群の各尺度得点及び群間の有意差検定（現在）
Table21 Each factor mean score, standard deviation, and t-test(between practicing group and not practicing group)

因　子	所属群(N=22)		非所属群(N=27)		t-test
	mean	S.D.	mean	S.D.	
F1	3.053	0.585	2.401	0.583	P<0.01
F4	3.439	0.487	3.086	0.399	P<0.01
F6	2.682	0.820	2.111	0.570	P<0.05
F9	2.970	0.459	2.543	0.540	P<0.01
F11	2.455	0.885	2.111	0.789	0.158(有意確率)
F12	3.053	0.585	2.401	0.583	P<0.01
V42	2.182	0.907	1.704	0.542	P<0.05

また、運動クラブ実施群は「否定的感情」尺度得点が示しているように、スポーツの持つ厳しさや険しさを実体験の中から認識しているため（結果と考察６－②の再認）、スポーツを享楽的側面のみで認知していないことも明確になった。

いずれにしても、運動クラブ活動の経験は、大学におけるスポーツ種目選択履修行動に影響を及ぼしていることは自明の理であろう。しかしながら、本研究対象授業・柔道を選択履修した学生の中には、中学校、高等学校、現在と運動クラブ活動経験の無い学生も存在する。従って、それらの学生のスポーツ種目選択行動要因の更なる究明は今後とも必至である。

Ⅳ　まとめ

本研究は、行動を決定する一要因であるスポーツ価値意識に着目し、実際に柔道を大学で選択履修した学生の心理的諸側面（柔道に対する態度、原因帰属様式、自己有能感など）との因果関係を明らかにすることを目的とした。尚、柔道に対する心理的諸側面との関係を明らかにするために、スポーツ価値意識を含め、心理的諸側面を因子分析的手法による特性上から分類・比較することとした。その結果は以下の如くである。

（1）調査対象者の中学校時の運動部所属率は65.6％、高等学校では、52.5％、大学においては44.3％とかなり高いことが示唆された。

（2）スポーツに対する価値意識項目の因子分析の結果、解釈・命名可能な因子は３因子であった。（競技スポーツ志向価値意識因子、享楽的スポーツ志向価値意識因子、手段論的スポーツ志

向価値意識因子）

（3）対象者のスポーツ価値意識については以下の如くである。

①スポーツの価値意識の中で、競技志向性、享楽的志向性については、それらを支持する傾向にある。

②スポーツの持つ手段論的価値に対する評価が非常に高いことが窺えた。

（4）柔道の態度構造を示す因子は６因子であった。（社会化を促進する精神鍛錬因子、否定的感情因子、徳性の涵養を伴う肯定的感情因子、心身健康促進因子、達成動機向上因子、体力向上因子）

（5）柔道が精神や身体に及ぼす効果的側面への認知は、過去の研究同様良好であった。

（6）柔道に対する感情も、否定的傾向が認められず他のスポーツと同様、肯定的な感情が優位であった。

（7）対象者のスポーツに対する有能感因子は、２因子（身体機能に対する自信因子、スポーツに対する統制感因子）が抽出された。特に、スポーツに対する統制感については、その尺度得点が高く、対象者の内発的動機付けの高さを示唆することとなった。

（8）対象者は、良好な原因帰属様式を有していることが明確になった。

（9）「スポーツは競技としての価値が第一義的である」「スポーツは何かを得るための手段」と考える志向性の強さは、共に授業者の内発的動機あるいは達成動機水準の高さを規定すると同時に、自発的スポーツ履修行動を誘発する可能性を孕んでいることが示唆された。

（10）運動クラブ活動の経験は、大学におけるスポーツ種目選択履修行動に影響を及ぼしていることが明確になった。

引用・参考文献

1）浅沼道成:体育専攻学生におけるスポーツ価値意識の変容に関する研究，鹿屋体育大学学術研究紀要，第７号，57-64, 1991.

2）E. L. デシ著，安藤延男，石田梅男訳：内発的動機付け，誠信書房，357,1980.

3）Kazuyuki Samejima , Yasumasa Ueda , Kenji, Doya , Minoru Kimura : Representation of Action-Specific Reward Values in the Striatum ,http://.www.Sciencemag.org/cgi/content/abstract/310/5752/1337.

4）小泉昌幸，伊藤巨志：大学生のスポーツ行動の意識に関する一考察，新潟工科大学研究紀要，９，107-112,2004.

5）久保正秋:「スポーツ」のふたつの意味と多元的意義，日本体育スポーツ哲学会シンポジュウム発表，1998.

6）宮元美紗子：達成動機の心理学，金子書房，18-30,1979.

7）文部科学省：創造的活力に富んだ知識基盤社会を支える高等教育～高等教育改革の新展開～，平成16年度文部科学白書第１部第１章第４節　1}，2005年３月http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab200401/hpab200401_2_027.html.

8）文部科学省：教育課程部会健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会体育分野ワーキンググループ（第７回）議事録・配布資料，2005年12月13日，http;//www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/gijiroku/027/06060902.htm.

9）大山剛：スポーツに関する態度形成とカリュキュラムの方向，http://www.edt.tamagawa.ed.jp/Fac-

ulty/oyama/htme/01kiyou6.html.
10）高橋進，貝瀬輝夫，矢野勝：柔道における高校生の意識構造について，武道学研究，17-1，92-94，1985.
11）高橋進，矢野勝，磯村元信：柔道に対する女子高校生の態度構造について―男子高校生との比較から―，関東学園大学紀要，16，109-115. 1989.
12）高橋進，木村昌彦、菅原正明，斉藤聡：大学一般体育実技履修者の原因帰属様式について―柔道履修学生の場合―，関東学園大学紀要第18集，145-156，1991.
13）高橋進，貝瀬輝夫、中村一成，椛澤博之，村田直樹，矢野勝，斉藤聡：青年期女子の柔道に対する意識について―青年中期の女性を中心として―，講道館柔道科学研究会紀要，第八輯，157-178，1999.
14）高橋進，貝瀬輝夫，村田直樹，斉藤聡，平野弘幸，矢野勝，椛澤博之，中村一成，三宅仁：柔道授業に構成的グループエンカウンターを導入した場合の効果について，講道館柔道科学研究会紀要，第九輯，157-179，2002.
15）上杉正幸：大学生のスポーツ価値意識について（5）香川大学教育学部研究報告，Ⅰ-67，1986.
16）上杉正幸：体育教師のスポーツ価値意識，香川大学教育額研究報告，1-69，1987.